

週報

こひつじ

第41巻 45号  
大津キリスト教会  
菊池郡大津町室 119  
TEL 096-293-4470  
FAX 096-293-4961  
牧師 米村 英二

種蒔きのたとえ

種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。また、別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったため、枯れてしまった。また、別の種はいばらの真中に落ちた。ところが、いばらもいつしよに生え出て、それを押しつぶさしてしまった。また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。(ルカ八の五〜八)

その一 人は何によって養われるか

人には二つの養いがある。からだの養いと魂の養いだ。からだの養いは何によるか。パナインによる。そこで人はみな食生活に気を配る。子どもの食生活を重要視したフエネロン(フランスの思想家)は、こんな助言を与えている。①いつもほとんど同時刻に食事をさせること。②必要に応じて十分食べさせ、その食事以外は与えないこと。

③刺激物を与えないこと。④あまりさまざまな料理を出さないこと。しかしながら、からだ以上に大切なのは魂の養いだ。からだは死ぬをもって終わるが、魂は永遠に生きるからである。それなのに、いったいどれだけの人が、魂の養いに心を砕いているだろうか。からだの養いはパンによると言いますが、魂の養いは何によるか。言うまでもなく言葉による。からだはパンによって、魂は言葉によって養われ、育つのである。その様子が詩篇の第一篇に描かれている。「幸いなことよ。悪者のはかりごとにと歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人」なんとまっすぐな人だろう。このような人格はどのようなにしてできあがってゆくのか。詩篇は答える。「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ」このように人はみな言葉によって造られてゆく。そして人生の最後に問われるのは、その人がどんな言葉で養われ、どんな人間になったかということである。強制収容所で極限的苦悩を体験したフランクは、こう言っている。「私たちは、強制収容所で人間を知りました。強制収容所では、あらゆる非本質的なものが人間から溶け去りました。人間がもつすべてのものの『金、権力、名声、幸福』が抜け落ちたところ、人間が『持つ』ことができず『ある』ことしかできないものだけが残ったところ、そこで残ったものは、人間自身だったのです」『苦悩する人間』生涯を通してどれほどの内面的力を持つ人間となったか。それ以外に人が成し遂げることのできるものはないのである。そしてそれを決めるのが言葉なのだ。この最も重大なことを、イエスは、種蒔きのたとえで説明された。イエスの言葉は、こう始まる。「種を蒔く人が種蒔きにでかけた」種を蒔く。種とは言葉である。ミレーの絵「種蒔く人」も、種蒔く人の喜びを描いているように思う。胸をはって収穫の日の到来を夢見て蒔く若い農夫。なんと堂々と蒔くときほど、誇らしく、希望に満ちた瞬間はないのではないか。岩波書店を始めた岩波茂雄は、

ミレーの「種蒔く人」を書店のマークにした。

日本に人の魂を揺り動かすような真理の種を蒔きたい、そんな大きな希望と気負いをもって出版社を始めたのに違いない。

さらに岩波は、どんな貧しい人でも買って読めるように廉価版の文庫を日本で最初に始めた人でもある。その最後のページに書かれた「岩波文庫発刊に際して」にはこうある。

「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」

その万人の欲求に応えて、世界の思想・文学を、だれにも買える安い値段の小さな本、岩波文庫に収めて彼は世に提供したのであった。日本の社会によい思想の種を蒔くという仕事は、何と栄えある仕事であったことか。

私は思う。福音もまた万人によって求められることを自ら欲する偉大な真理であると。

だから福音の種を蒔くというのは栄誉ある仕事なのだ。そこで聖書は言う。

「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしつかりやりなさい」(二テモテ四の二)。

「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう」(伝道者の書一の一)

「朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいくかわからない」(伝道者の書一一の六)

(続)

### 今日の礼拝

○礼拝は午前10時半から。

○教会学校は午前10時半から。

○説教は米村牧師。

○礼拝後、昼食交わり会。

○次週(十一月二三日)の礼拝

○説教は宮元隆博さん。  
○米村牧師は台湾の教会で奉仕

をしています。

### 先週の礼拝報告

○司会は合志文利さん、次女の真理名さんが一緒にリードしてくださいました。

○説教は、ルカー10章から、弟子たちを派遣するときのイエスの訓戒についてでした。

○礼拝参加者は90名(男三二、女五八)、それに子どもが五名、合わせて九五名でした。

### ケリーさん家族来会

この教会の創立者であるチャック・ニコラス宣教師の長女ケリーさんが家族四人とともにアメリカから来日し、礼拝につどってくださいました。ケリーさんは二〇年ぶりの来会ですが、夫のデーヴィッドさんは初めてです。喜びにあふれた礼拝賛美に参加して、長女

のリツシエルさんはチャックさん(リツシエルさんの祖父)が、ここにいたらどんなに感激したことだろうと語ってくれました。チャックさんは一五年前に、妻のペギーさんは一〇年前に天に召されました。

ニコラス夫妻が来日したのは一九六七年のことです。一年間東京の日野教会を牧会したあと、熊本にやって来ましたが、大津町に移り住んだのは一九六九年のことです。その頃、長女のケリーさんは中学生になるかならないかの年齢だったかと思えます。

チャックさん家族は一九七二年には大津を離れ、埼玉県の所沢に移り、その後、帰国しています。大津にいたのは正味三年です。しかし、そのときチャックさんによって蒔かれた種は少しずつ成長し、こうしてこの小さな町に教会が形成するまでになりました。不思議な神のわざというほかありません。

### 牧師のメールアドレス

yonemura@ja2.so-net.ne.jp